

# 中国語圏出身の留学生における漢字語彙の誤用の一因を考える ——日本語の外国語としての再認識を促す図説の試み等を踏まえて——

小園 晃司\*

**概要：**中国語母語話者は日本語の漢字語彙を母語のフィルターを通して眺め、「解ったつもり」の状態に陥り易い。そこで、本学宇都宮キャンパスにおける日本語関連科目にて、こうした傾向性を可視化し、日本語の外国語としての再認識を促すために図説を試みた。しかし、中国語圏出身の留学生の、図説後に実施した記述式アンケートの回答には既に、非漢字圏出身者のそれには見られない漢字語彙の誤用が散見された。こうした誤用は、日本語の語感ではなく、母語の感覚を支える既習知識としての漢字を頼りに、文章を作成した結果である可能性が窺える。

## 1. はじめに

本学宇都宮キャンパスでは2024年現在、百数十名の留学生が学ぶ。うち、中国語圏出身の留学生が過半数を超える。留学生に対しては受験時に「JLPT（日本語能力試験）」におけるN2レベル相当以上の日本語力を求めている。ただし、実際にはN2レベルの日本語力では、日本語で行われる講義内容を完全に理解し、日本語で自身の考えを文章に纏めることが容易ではないと思われる。加えて、漢字圏である中国語圏出身の留学生にとっては、日本語の表記形態の一つである漢字や二字以上の漢字から成る漢字語彙<sup>1)</sup>の存在により、日本語が理解の容易な言語と捉えられ、しばしば「解ったつもり」の状況に陥る可能性が危惧される。そして、これに付随して、漢字語彙の誤用が生じる場合がある。

そこで、日本語と中国語の漢字語彙について、その語義の両者間における異同の把握が重要であることは言を俟たない。とりわけ、中国語母語話者にとって馴染み深い漢字語彙が日本語にも同形同義語として存在する場合、この活用が日本語運用能力の向上に繋がるとすれば、それはある意味での「正の転移

---

\* こぞの こうじ 帝京大学宇都宮キャンパス リベラルアーツセンター

(positive transfer)」といえよう。実際に、この方面の代表的研究といえる文化庁(1978)『日本語教育研究資料 中国語と対応する漢語』では、「中国語を母国語とする者が日本語を学習する場合、漢字についての既習知識を利用すべき」(文化庁, 1978:5)との観点に立ち、初中級の日本語教育で頻出する漢字語彙<sup>2)</sup>を①「S (Same)」、②「O (Overlap)」、③「D (Different)」、④「N (Nothing)」に4分類している。これらはそれぞれ、①「日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの」、②「日中両国語における意味が一部重なっているが、両者の間にずれのあるもの」、③「日中両国語における意味が著しく異なるもの」、④「日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの」とされる。そして、分類の結果、「S」が全体の3分の2を占め、「D」や「O」は合わせて1割に満たなかったとする(同:12-14)。また、「O」に分類した中でも、意味のずれた部分で余り重視するに及ばないものがあり、そういうものは、その部分を切り捨てて「S」に分類し直した。また、重複している部分が余り一般的でない場合には、その部分を切り捨てて「D」または「N」に分類し直(同:13)したとされる。

しかし、言語は本来、その使用する「集団の歴史を背負ったもの」(今富, 1973:3)であるため、「仮に互いに影響関係の認められる地域の言語間に同形同義語が存在したとしても…(中略)…その語彙に託されたイメージを含め、その意味内容や用いられる文脈が完全に一致するとは限らない」(小園, 2022:41)との見解に立てば、こうした漢字に関する「既習知識」(文化庁, 1978:5)に依る学習にはある盲点が潜んでいよう。それは、とりわけ、日本語の水準が初中級レベルにある中国語母語話者が、こうした学習方法を経ることで、その扱う日本語の漢字や漢字語彙には、母語におけるそれらに具わった“記憶やイメージ”の働きが内在している可能性を見落としてしまう、ということである。これが延いては、半ば母語の感覚で日本語を扱う姿勢の形成を導くと共に、その作成する日本語にも不自然さを生じさせる一因となるのではないか、と考える。

こうした点を踏まえ、筆者は中国語母語話者にとって、日本語はあくまで“外国語”であるという至極当然の事実を再認識してもらうべく、担当する留学生対象の日本語関連科目にて、これに関する図説の導入を試みた<sup>3)</sup>。

本稿では以下、図説後に受講生に行ったアンケートの記述回答等も踏まえつつ、中国語圏出身の留学生の漢字語彙の誤用の一因について、考えてみたい。

## 2. 図説の導入：日本語の外国語としての再認識を促すために

中国語母語話者の場合、日本語における漢字語彙の影響により、日本語での読み書きを行う際、無意識に母語を操る感覚の延長で、それらの漢字語彙を扱う可能性がある。その結果、中国語圏出身の留学生の日本語による作文には、時に、非漢字圏出身留学生には見られないタイプの漢字語彙の誤用、つまり、母語の漢字語彙を、その語義やニュアンスの相違を確認せず、直接、日本語の文中で用いる誤りも見受けられる。これは表面的には単なる怠惰な学習姿勢が招く現象に映るが、その実、常に日本語を外国語として認識しつつ、これを学び、扱っていないことに起因する問題であるように感じられてならない<sup>4)</sup>。

そこで、筆者は後述するように、担当する日本語関連科目において、意識的に日本語を外国語として捉えなければ、母語のフィルターを通して日本語の中の漢字や漢字語彙を把握してしまう傾向性を、図式によって可視化した。とりわけ、日中同形語彙については、こうした傾向が一層顕著であると思われる。授業内でも通常の文法事項の説明等に加え、早晚、これに関する何らかの形で注意喚起が求められるのではないだろうか。

従来、類義語を表す図式として多く使用されてきたように、日中同形語彙の解釈や使用の注意に関する説明においては、「ベン図」が用いられることもあ

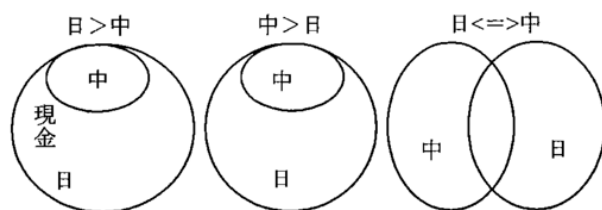


図1 日中漢字語彙の意味範囲

図は陳毓敏 (2003 : 101) 「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観-意味と用法を中心に」より引用

るだろう。語義の重なる部分とそれ以外の部分についての関係が、一目瞭然であるためである。例えば、陳 (2003) は日中漢字語彙の意味の範囲の違いを認識させるため、「日本語の漢語を教授する際、まず日本語

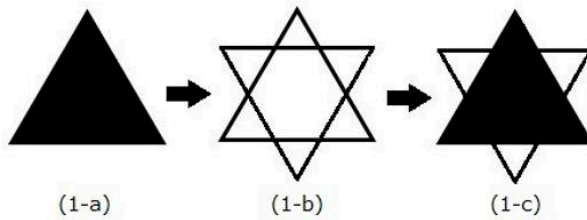
と中国語で意味範囲の異なるものを図式で提示し、その授業で勉強した漢語を宿題として調べてもらう工夫をすれば、より印象深くなり、母語の干渉も最小

限に収められる」（同:101）として上図を例に、実用性に富んだ提案を行っている。（「現金」という日本語は、日本語でも中国語でも「キャッシュ」の意味で用いられるが、日本語には「現金な人」のような使い方もあるので、中国語に比べ、意味範囲が広い」〔同:101〕として、図式では「現金」が例に挙げられている<sup>5)</sup>）。日中間の同形漢字語彙の意味範囲を示すための「ベン図」の提示は、上に述べた理由により、中国語母語話者への日本語教育のみならず、日本語母語話者への中国語教育の現場でも、しばしば、なされるものと思われる。ただし、ベン図を用いて「母語のフィルターを通じて外国語を眺める」傾向性を、学習者にイメージさせることは困難」（小園, 2022:41）である。

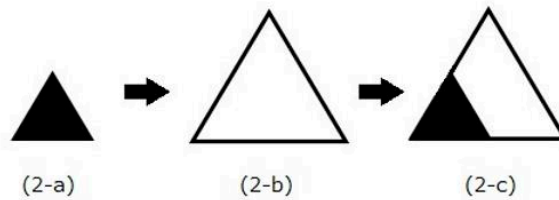
こうした点に鑑み、中国語母語話者の日本語学習者が漢字語彙の誤用を防ぐための最も基本的な学習姿勢、つまり“日本語を外国語として再認識する”姿勢を導くために、筆者は担当する留学生対象の日本語関連科目（理工学部1年生対象の必修科目「文章表現法<sup>6)</sup>」、及び宇都宮キャンパス全学部の2年生以上の留学生を対象とする選択科目「日本言語文化」）において、自身の考案した図式を用いた図説導入を試みた。そして、その内容を小園（2022）にて報告した。なお、図説の試みの対象者としては、当初、中国語圏出身の留学生を想定していたが、受講生には非漢字圏出身者も含まれるため、実際には受講生全員に対して実施した。これにより、事後に実施した記述式アンケートの結果においては、中国語母語話者のそれとの比較も可能となった。やや長いが以下に、小園（同:40-41）より、図説で用いた図式及びその指し示す意味内容に関する説明部分を引用する。

図1、2の図形（正三角形および、二つの三角形の複合からなる星形）のうち、白色と黒色はそれぞれ、二つの異なる言語の（その具わった意味やイメージを含む）語彙や表現を表わしている。日本語と中国語を例に取るならば、たとえば、図1の白色の星形（1-b）、および図2の白色の三角形（2-b）は日本語の語彙や表現を表わし、図1と2における黒色の三角形（1-a）、（2-a）は中国語の語彙や表現を表わす。そして、（1-

c) と (2-c) はそれぞれ (1-a) と (1-b) 、 (2-a) と (2-b) を重ねたも



【図1】



【図2】

のである。中国語母語話者の日本語学習者の場合、同じく漢字の用いられている日本語の文章を目にした際、日本語の漢字に自ずと意識が向かうものと思われる。つまり、これを図1にあてはめて説明するならば、日本語の語彙や表現としての白い星形 (1-b)

を目にした際に、(1-c) にみえるように、三角形の外縁に張り出した白色の小さな三角形には目が行かず、ただ中心部の黒色の三角形、つまり母語である中国語との共通部分のみに意識が向けられる可能性も考えられる。こうした場合、日本語における漢字・漢字語彙やこれを含む表現を、単に（その漢字や漢字語彙に対するイメージを含む）母語の既成知識を手掛かりに解釈する可能性が生じる。…（中略）…また、図2の示す内容も基本的には図1と同様であるが、形状を同じくする(2-a)と(2-b)の関係にみえるように、特に日中両言語間における同形語や表面的に類似した表現に接する際、注意を払わなければ、それらの語義や意味の範囲も母語のそれと一致するものとして捉えてしまう可能性を示している。しかし、実際には日本語における意味が中国語におけるそれに比して広いケース(2-c)が存在する（同様に、中国語における意味が日本語のそれよりも広いケースも存在する）。…（中略）…図1、2における白と黒の二つの図形が重なり合った、最も右側の形(1-c)、(2-c)が示すように、日本語の語彙や表現の中に中国語の要素を発見した際、“余白”の部分としての(1-c)における黒色の三角形の外縁に張り出した小さな

白色の三角形の部分と、(2-c)における黒色の三角形の右側に接する白色の台形の部分にも、十分注意を払うべきである…(中略)…この余白部分は日本の社会・文化的背景の語彙や表現への反映の一つでもあり、ここに眼差しを投じることによって、文脈に応じた語彙や表現の解釈や使用が可能になると考えられるためである<sup>7)</sup>。

中国語母語話者が日本語の漢字語彙に接した際、母語との意味上の重なる部分に意識が向かうのは、半ば不可避な傾向であろう。そして、意味の重ならない部分は、意識的にそこに目を向けようと自らに働きかけない限り、また、何らかの機会によって気づきを得ない限り、往々にして“見えない存在”として在り続けるであろう。

この問題を考える上で、言語社会学者・鈴木孝夫(1975)の経験談は興味深い。通常、我々は英語における「lip」を意味する日本語の語彙は何かと問われれば、即座に「唇」と答えるのではないだろうか。「lip」は今や、外来語(「リップ」)としてもすでに日本語に定着しているともいえよう。しかし、実際には英語の lip の意味するところの範囲は日本人の考えるそれよりも広いという。両者の関係について、鈴木は「一対一の対応がうまく行き、別に余ったり、足りないことは無さそうに見える」(鈴木, 1975:231)ものの、「native check をして見ると、こんな所にも意外な問題があることが分った。日本語の唇は、口のへりの赤い部分だけを指す。ヒゲの生える所は、鼻の下とか言って、少なくとも唇の範囲には入らない。英語の lip はその部分をも含んで差支えない」(同:231-232)とする。これはネイティブチェック無くしては、得られなかった気づきである。我々が「解っているつもり」の語彙も、それらを外国語と認識したうえで、その語義や用法を確認する作業の重要性が、鈴木の実験談からは見て取れる。

日中間に跨る漢字語彙の場合、英語語彙と片仮名で表される外来語との関係に比して、例えば、簡体字や繁体字で書かれた漢字と日本語の漢字とでは、その視覚に与えるイメージの差がより少ない。加えて、往々にして両者における語彙を構成する漢字の字義の重なりが大きいがゆえに、中国語圏出身の留学生にとっては、こうした気づきに繋がる確認作業を怠る可能性が生じ易いだろう。

たとえば、授業中、教員に対して「質問があります」というべきところを「問題があります」とする、誤った表現を耳にすることがある。これなどは、日中間における「問」という漢字に具わる共通する字義に意識が向けられ、母語の発想で「有问题/yǒuwèntí（問題がある）」が想起された結果であると思われる。したがって、こうした気づきを得るための大前提として、中国語圏出身の日本語学習者には、常日頃から日本語を外国語と認識する習慣が求められよう。

### 3. アンケートの記述回答にも認められる漢字語彙の誤用

さて、図説実施後の翌週に、筆者は記述内容が成績には一切影響しない旨を説明したうえで、「自由記述式アンケート」を実施した。アンケートでは、図説で用いたものと同一の図式をアンケート用紙上に提示のうえ、「言語を学ぶ際に、わたしたちが犯し易い間違いについて、上の図からわかることを書いてください。また、その間違いを犯さないためにはどうすればよいですか。」と尋ねた。

アンケートの実施目的は、意識的に日本語を外国語として再認識する一環として、日本語の漢字語彙やそれを用いた表現を学習する際に「解っているつもり」の状態に陥らず、それらを日本の社会・文化的背景の中で捉える重要性を、回答を通じて考えてもらうためである。また、留学生自身の有効視する学習方法を把握するためでもある。

アンケートの有効回答数は24部中21部であり、うち、中国語圏出身者の回答が14部であった。そして、アンケートの結果、言語を学ぶ際に間違いを犯さないためには「文脈や言語の文化背景に注意を払うべき」とする内容が3割を占めた。それらの一部の記述回答における中心的内容を以下に引く<sup>8)</sup>。括弧内は出身国・地域と図説実施時の学年を示している。

- ・この間違い（特定の語彙に触れた際、母語との共通の語義のみに注意が向けられること<sup>9)</sup>）を避けるためには、コンテクストを重視する。単語やフレーズを学ぶ時には、それが使用される文脈や例文を確認し、実際の会話や文章での使用例を学ぶことで、単語の正しい使い方やニュアンスを理解する。個々の要素を学ぶだけでなく、全体の文脈でそれらを適用し、実際の会話や文

章の中で練習することが重要です。(ベトナム:3年)

- ・言語を学ぶとき、単なる訳した言葉を覚えると、その言葉の使い方や他の意味などについて、私たちが犯しやすいと考える。したがって、言葉を学ぶとき、言葉の使い方がその言語の文化からの視点で理解できるまで学ぶべきであると思っている。(ベトナム:1年)
- ・言語を勉強する際に文化の差別(「相違」の意で使用。)があるから、表現の時は間違いを犯しやすい。…(中略)…文章を書くとき、こんな問題をもっと注意しなければならない、同時に文化の面からこの差別を理解して、この問題を犯さないと役立つと考える<sup>10)</sup>。(中国:1年)
- ・中国語母語話者として、私には中国語の漢字の意味から日本語の漢字の意味を推測する癖がある。十中八九、推測できることもあれば、完全に推測が外れることも多い。この問題を防ぐには、一字一句、きちんと日本の漢字を学ばなければならない。そうしなければ、勘違いが生じる。また、日本語の文脈の中でそれらの意味を理解するようにしなければならない<sup>11)</sup>。(中国:1年)
- ・母語干渉を克服するために、日本語を勉強する際に、日本の文化を同時に勉強することも不可欠である(中国:1年)

このほか、漢字語彙の誤用を犯さないための具体的な方法として、「言語間の共通点を見るだけではなく、教科書と辞書に従って学ぶべき(中国:1年)」、「間違いを犯さないように、もっと日本語の本を読み、もっと日本人と話したりした方がいい(中国:1年)」、「間違いを犯さないために、やはり自分で学ぶ後に分類しなければならない(中国:1年)」、「理解するとき半分以上漢字によって意味が正しいが、ほかの漢字は分からないが意味が違う。これを変えるには、日本の文章や新聞をよく読む、よく辞書を調べる。かくときもよく調べるほうがいい(中国:3年)」、「日本人と話し、日本のメディアをよく見ることは役に立つかもしれません(中国:1年)」といった回答が寄せられた。同時に、「(誤った語彙を)そのまま使って日本語ネイティブの人に注意されてから、直されて覚えればいい(台湾:1年)」というように、敢えて、間違えることによって得られる気づきを重視する考えも聞かれた。

さて、これらの回答が示すように、間違いを犯さないためには、大きく「辞書等を用いた確認作業」と「日本語母語話者との交流を通じた確認作業」の二つの確認作業が有効的と考えられているようだ。鈴木（1975:229）も第二言語習得に当たっては、海外での長期滞在や学習対象言語のネイティブスピーカーを利用した学習を最良の方法としたうえで、辞書や文法書を用いた知識の整理や補強の有効性に言及する。ただし、前者に関しては、これの徹底を習慣にしている受講生は一定数に止まると思われ、後者についても、日本人の多くは留学生の「表現する日本語の意味が大体において理解できさえすれば、仮に多少の誤りがみられるにせよ、敢えてこれを指摘しようとししない」（小園，2022:39）可能性があり、「化石化（fossilization）」を導く一要因ともいえよう。

ところで、アンケートにおける中国語圏出身の留学生の記述内容の特徴の一つとして、自身の漢字語彙の誤用に関する経験への言及が挙げられる。その割合は6割強に及ぶ<sup>12)</sup>。また、図らずも、一部の記述回答は、漢字の存在が却って中国語母語話者の日本語運用能力の向上や発揮を阻む要因となっている可能性を再認識させるに足るものだった。記述内容の意味こそ推測できるものの、不自然な用いられ方をした漢字語彙が複数の回答に見られたのである。

一例を挙げれば、「日本語も漢字があるが、表現方法は中国語との大きな差別がある（中国語の「差別」[差別] /chàbié)を「違い」の意で使用。）」、「日本語と中国語が類似している点は私が日本語を学習する際の優勢である（中国語の「優勢」[優勢] /yōushi)を「アドバンテージ」の意で使用。）」、「日本の文化を了解しない（中国語の「了解」[了解] /liǎojiě)を「理解」の意で使用。）」、「練習ばかりは無用である（中国語の「没用」/méiyòng 〈役に立たない、の意〉）における「没/mei」を「无〔無〕/wú」に置き換えて「役に立たない」の意で使用か。中国語にも「无用〔無用〕/wúyòng」という語彙が存在し、日本語の「無用」と同じく、「役に立たない」という意味を表わすが、ここでの用いられ方には違和感を覚える。」等である。また、「ただ言語を学得し（日本語と中国語には共に「学習（学习/xuéxí）」と言う語彙が存在するため、誤って「習得」の意で使用か。）」といった、不自然な漢字語彙の使い方も見られた。こうした「言語間エラー（interlingual error）」は、母語における漢字語彙をそのまま日本語として使用した結果生じたものであると思われる。

#### 4. 漢字語彙に支えられた母語の感覚がもたらす影響

ところで、非漢字圏である、フランスの国語教育は、そもそも「音声の連鎖を基盤にし」（蓮實, 1977:18）、「文字に写されたものは音声の影でしかない」（同:19）と考えられている。こうした中、フランス語母語話者であり、幼少期にフランス古典文学の暗唱を経験した、文芸評論家・蓮實重彦の妻は、かつて、日本の公の幼児教育の現場で詩歌の暗唱等が行われていないことに驚いたという。なぜならば、「子供たちは詩歌の朗読をならう以前に、詩のごときものを作らねばならない」（同:293）ためである。その是非は別として、ここには“聴覚情報による語感形成こそが表現を導く”、との前提に立った発想が垣間見える。

ならば、語族の枠組みや言語習慣の相違を蔑ろにはできないが、一部の中国語圏出身の留学生による漢字語彙の誤用は、ある意味では、日本語の語感が未定着な状況下、既習知識としての漢字を頼りに、“自力”で日本語を作成することにより生じている可能性も指摘されて良い。つまり、朗読や暗唱その他の方法によって培われた日本語の語感に基づいて文が作成されるのではなく、ある種の生命力を保った母語としての中国語の漢字を、そこに介在させつつ、これが成されるのである。そして、こうした内在する中国語の漢字の働き、すなわち、その言及対象と自身とを媒介するに足る働きこそが、日本語の漢字語彙の用法にそぐわない用い方、つまり、誤用を生じさせ、時に作成した文章が「違和感」を感じさせる一因となっているのではないだろうか。

さて、上に引いた記述回答に見られるような漢字語彙の誤用は、非漢字圏出身の留学生のそれには存在しなかった。非漢字圏出身者の日本語学習方法が一樣とは限らず、安易な断定は許されないが、漢字語彙をセンテンスの中で聴覚情報としてインプットしている可能性が、以下の（非中華系マレーシア人を含む）母語で漢字を用いない留学生の記述回答の一部から窺える。

- ・マレーシアでは漢字はないから漢字を何回読んでも、意味をわからない場合もあって、音から覚え易い人もいる。そう言っても、時々間違いをすることもある。それは同じ音読みだが漢字は違う場合、例えば参加と酸化だ。（マ

レーシア:1年)

- ・(日本語の聴解の試験の際に<sup>13)</sup>) 私は聞くときにはほとんど満点だった一方、中国人は聞いたところを漢字化して、まちがってしまうことが多い(シリア:1年)

民俗学者・宮本常一は、かつて、『忘れられた日本人』(1960)の中で、伝承調査で出会った有字の伝承者と無字の伝承者との相違について、次のように言及している。「文字を知らない人たちの伝承は多くの場合耳からきいた事をそのまま覚え、これを伝承した…(中略)…しかし文字をよみ文字にしたしむものは、耳できいただけでなく、文字でよんだ知識が伝承の中へ混入していき、口頭のみ伝承の訂正が加えられるものである」(宮本, 1960:218)というのである。もちろん、こうした傾向性と、漢字圏である中国語圏出身の留学生と非漢字圏出身の留学生との日本語運用上の特徴の違いを同日に論じることは、科学的とはいえないだろう。ただし、中国語圏出身の留学生が母語の“感覚”で用いる漢字語彙——特定のイメージや記憶の具わった母語の表記形態としての漢字語彙——の内なる作用が、恰も宮本の指摘する文字を知る者における“文字”の、伝聞内容の訂正を導く働きと重なるように、日本語での文章作成の際、文の方向性を牽引する可能性は否定し得ないのではないだろうか。翻訳語研究者・柳父章も、学問や思想は基本的に言葉を通じて思考されるとしたうえで、文を組み立てる際の言葉の選択は、文法や論理の制約のみに基づいて決定されるのではなく、「感覚が究極的には文法を支配」(柳父, 1981:178)する、とする。特に、表意文字としての漢字や、それらからなる漢字語彙は、こうした感覚に働きかける作用を顕著に有するといえるだろう。小説家・谷崎潤一郎の『文章読本』(谷崎, 1934:121)における以下の言は、こうした点に関して、とりわけ示唆に富むものである。

最初に思想があつて然る後に言葉が見出されると云ふ順序であれば好都合でありますけれども、実際はさうと限りません。その反対に、先づ言葉があつて、然る後にその言葉に当て嵌まるやうに思想を纏める、言葉の中で思想が引き出される、と云ふこともあるのであります。…(中略)

…最初に使った一つの言葉が、思想の方向を定めたり、文体や文の調子を支配するに至ると云ふ結果が屢々起こるのであります。

一作家の創作経験から導かれた見解を以て、これを一般法則とすることは適当ではないかも知れない。そして、当然のことながら、谷崎がここでいう「言葉」が、漢字語彙を指すとは限らない。ただし、母語の“感覚”を支える漢字語彙の日本語の文章作成の際に及ぼす影響には無視できないものがあるのではないだろうか。少なくとも、前述のとおり、日中両言語間に存在する漢字や漢字語彙には、互いの地域の記憶やイメージが具わっており、両者の意味や用いられる文脈が完全一致するとは限らない。ゆえに、極論すれば、仮に同形同義語を用いて想起、思考されたとしても、その内容が完全一致するとはいえない。したがって、中国語の漢字を扱う感覚で用いられた漢字や漢字語彙が、その作成する日本語の文章の全容に何らかの影響を来す可能性は、作文指導の際に考慮されるべきではないだろうか。

## 5. おわりに

以上、眺めてきたように、筆者は担当する日本語関連科目において図説を導入し、中国語母語話者が日本の漢字語彙に接した際に、母語のフィルターを介してこれを眺める傾向性を可視化して示すと同時に、中国語圏出身の留学生に“外国語”として日本語を再認識することを促した。しかしながら、図説後に実施したアンケートの記述回答には、既に漢字語彙の誤用が散見され、中国語母語話者にとって日本語を外国語として捉えたうえで、その漢字語彙を適切に文中で用いることが容易ではないことが改めて認識された。また、非漢字圏出身の留学生の記述回答には、漢字の誤用は認められなかった。これは恐らく、中国語圏出身の留学生とは異なり、漢字語彙がセンテンスの中で聴覚情報としてインプットされる傾向が強いことによるものであろう。反対に、中国語圏出身の留学生の場合、視覚情報によって、日本語の漢字語彙を母語のそれと同一視し、「解ったつもり」でそれらの語彙に支えられた母語の感覚に基づいて文章を作成している可能性がある。

中国語圏出身の留学生にとって、既習知識としての漢字の存在は、確かに日

本語を身に着けるうえで「正の転移」として作用する可能性があるだろう。しかし、厳密に言えば、同形同義語でさえも、母語における当該漢字語彙の内包するイメージや意味の範囲が、日本語のそれと完全一致するとは限らない。そのため、“感覚が文法を支配し、語彙が思想を導く”との前提に立てば、母語を扱う感覚で漢字や漢字語彙を用いることにより、その作成される日本語の文章において、誤用と違和感を生じさせ易いものと推察される。

## 注

- 1) 本稿では広く漢字で表された語彙を「漢字語彙」と表記する。
- 2) 文化庁（1978）『日本語教育研究資料 中国語と対応する漢語』では「漢語」と表記。
- 3) 本取り組みは、現時点では未だ試行段階にあるため、本学宇都宮キャンパスで学ぶ全留学生を対象に行っている訳ではなく、筆者の担当する科目のみで実施している。
- 4) 中国出身の留学生の日本語の作文には、しばしば、「簡体字」も散見される。非漢字圏出身者と異なり、漢字を既に知っているため、日本語の漢字表記を逐一確認しながら覚え、用いる、という作業が無意識のうちに省かれている可能性がある。
- 5) 「現金」の例は、三浦昭（1984:103）「日本語から中国に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53号（日本語教育学会）より引かれたもの。
- 6) 実際には日本語の基礎力を培い、アカデミックライティングの基本を学ぶため、経済学部で学ぶ留学生も例年、選択科目として「文章表現法」を履修している。
- 7) 本稿への引用に当たり、図と文字の位置については、紙面の都合上、これに変更を加えた。なお、図説では特定の言語の語彙や表現を表わす形として「正三角形」を用いたため、当初、図1の二複合三角形が、本図説とは全く無関係な宗教的シンボルを想起させることが懸念された。しかし、理解のし易さの点から、正三角形を用いることとした。
- 8) 授業内で実施したアンケートについては、研究目的で個人名を特定しない条件で、論文等で使用する可能性がある旨、留学生対象の「文章表現法」や「日本言語文化」のシラバス上に明記している。
- 9) 丸括弧内の補足は引用者。
- 10) 下線及び丸括弧内の補足は引用者。「差別」の誤用例については次頁で再度取り上げる。
- 11) 本記述回答は中国語でなされていたため、本稿の筆者が日本語に訳出した。
- 12) 誤用例には、正誤の判断が困難なものも含まれていたため、本稿ではそれらの逐一の引用を控えた。
- 13) 丸括弧内の補足は引用者。

## 引用文献

- 今富正巳（1973）『中国語⇄日本語の翻訳の要領』中国語研究学習双書 11, 光生館
- 小園晃司（2022）「日本語を外国語として認識する姿勢を導くための試み—留学生対象の「文

- 章表現法」での取り組みを例に一」『日本言語文化研究』7号, アジア日本言語文化研究会〔日本部会〕
- 鈴木孝夫（1975）『ことばと社会』中央公論社
- 谷崎潤一郎（1934）『文章読本』中央公論社
- 陳毓敏（2003）「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観一意味と用法を中心に一」『第二言語習得・教育の研究最前線』日本言語文化学会
- 蓮實重彦（1977）『反＝日本語論』筑摩書房
- 宮本常一（1960）『忘れられた日本人』未来社
- 柳父章（1981）『日本語をどう書くか』PHP 研究所